

日付	曜日	活動内容 & 場所	備考
5月18日	月	チューリップ学園 (Stichting TULIP GAKUEN/アムステルダム日本人幼稚園)	
5月19日	火	SAMA Autisme Centrum 自閉スペクトラム症 (ASD) を中心とした発達支援を行う療育施設視察	Rijks museum国立博物館見学
5月20日	水	チューリップ学園 オランダの制度・支援体制についての講義 「配慮が必要な子どもの支援方法」について学習 講師：平田 クミ子先生 午後：現地校通園幼児との交流会参加	Van Gogh Museum Amsterdam見学
5月21日	木	オランダ社会見学、振り返り	nintjeミュージアム、Mauritshuis美術館
5月22日	金	移動日：オランダ→ベルギー	移動
5月23日	土	休み	
5月24日	日	休み	

～地域で子どもを支えるインクルーシブな仕組みづくり～

ー オランダのユースチーム制度を参考に ー

(2026年5月18日～24日)

研修施設：チューリップ学園 (Stichting TULIP GAKUEN/アムステルダム日本人幼稚園)

園長 藤本 孝仁先生、副園長 藤本 千絵先生

オランダ・アムステルフェーン市にある SAMA Autisme Centrum (以下、Sama)

オランダ制度説明：講師：平田 クミ子 先生

経歴：ライデン大学教育学部修士課程修了。現在、オランダ政府の難民センターにて、親のいない未成年難民の支援に携わる行動専門家として勤務。日本・オランダ両国の小・中・高等学校教員免許を有するほか、オランダ ADHD センター認定コーチ、SKJ 認定教育心理士の資格を持つ。発達支援およびインクルーシブ教育分野に精通している。

オランダ研修報告

今回のオランダ研修では、チューリップ学園や自閉症児向け療育センター「Sama」への視察、また教育・福祉分野で活躍されている平田クミ子先生へのインタビューを通して、多文化社会における子育て支援やインクルーシブ教育のあり方について多くの学びを得ることができた。特に印象的だったのは、「子どもを既存の環境に合わせる」のではなく、「子どもが参加できるように環境を調整し続ける」という視点が、教育・療育・地域支援のあらゆる場面に共通して存在していたことである。

多文化社会の中での「居場所」としてのチューリップ学園

チューリップ学園（Stichting TULIP GAKUEN／アムステルダム日本人幼稚園）は、オランダで生活する日本人家庭の子どもたちに、日本語と日本文化を基盤とした幼児教育を提供する施設として26年前に設立された。当初は、日本語や日本文化に触れるための活動として始まったが、「海外でも日本語で子育てをしたい」という保護者の願いを背景に、日本人幼稚園として発展してきた。

園では、「海外にいても日本語で安心して育つ環境を保障すること」を理念として掲げており、幼児期の母語形成を非常に大切にしていた。日本語を単なる語学ではなく、「感情」「思考」「人格形成」を支える土台として捉えている点が印象的であった。

今回の研修を通して特に感じたのは、チューリップ学園が単なる日本語教育の場ではなく、多文化社会の中で生活する家庭にとっての「心の支援」の場になっているということである。オランダ社会の中で、日本人家庭は言語的・文化的マイノリティとして生活している。価値観や文化、宗教の違いの中で子育てを行うことには、多くの不安や孤独感が伴う。



そのような中で、日本語で気持ちや悩みを共有できる環境があることは、保護者にとって大きな安心感につながっていた。保護者同士や教職員とのつながりを通して、「一人ではない」と感じられることが、異国で生活する人々の大切な支えになっていると感じた。

私自身も今回の研修でフィンランドやオランダに滞在し、英語が通じない場面に直面した際には、不安や孤独感を感じるがあった。その経験を通して、言語は単なるコミュニケーション手段ではなく、人が安心して生活するための「心の土台」であることを強く実感した。母語で自分の気持ちを表現し、理解してもらえることは、多文化社会の中で安心して生きていくために非常に重要であると感じた。

また、日本でも今後さらに国際化が進み、多文化・多言語環境の中で生活する家庭が増えていくことが予想される。その中で、日本語だけではなく、英語や翻訳ツールなどを活用しながら、「理解しようとする姿勢」を示すことが、保護者の安心感につながるのではないかと感じた。完璧な言語支援ではなくても、「理解しようとしてくれる人がいる」ということ自体が、大きな支えになるのだと思う。

オランダの支援制度とインクルーシブ教育

今回の研修では、平田クミ子先生へのインタビューを通して、オランダにおける特別支援教育や子育て支援制度についても学ぶことができた。

オランダでは、地域ごとに「ユースチーム」と呼ばれる専門チームが配置されており、保護者、保育施設、学校、医療機関などが連携しながら、子どもや家庭に必要な支援を検討している。支援は一律ではなく、その子どもや家庭の状況に合わせた「オーダーメイド」の支援として考えられていた。

また、2014年に制定された「パッセント・オンダバイス（その子に合った教育）」の理念に基づき、学校側が支援を必要とする子どもの受け入れを拒否するのではなく、「どうすればその子が学べるか」を地域全体で考える仕組みが整えられていた。一般校と特別支援学校の間違った学校など、多様な選択肢が用意されている点も特徴的であった。

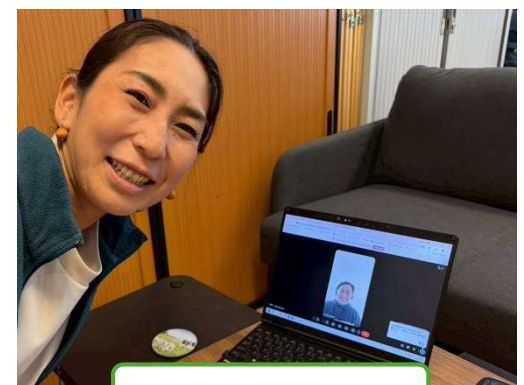
さらに印象的だったのは、「専門家がそばにいても保護者の支えになる」という言葉である。支援とは、子どもの課題を改善することだけではなく、保護者が孤立しないように支えることでもあると感じた。保護者同士が集まり悩みを共有できる「コーヒータイム」のような場づくりも、重要な支援として位置づけられていた。



現地校に通う子どもたちとの交流会



地域の親子対象 子育て支援活動



平田先生による制度説明

Sama で学んだ「参加を支える」療育

自閉症児向け療育センター「Sama」での視察では、インクルーシブ教育の本質について深く考えさせられた。

Sama では、「学校に入れるかどうか」を判断するのではなく、「どうすれば子どもが学校や社会に参加できるようになるか」を、多職種と保護者が一緒に考え続けていた。対象は主に3歳から12歳までで、正式な診断がなくても利用できる仕組みになっていた。重要視されていたのは診断名ではなく、「その子にこの環境が合っているか」という視点であった。

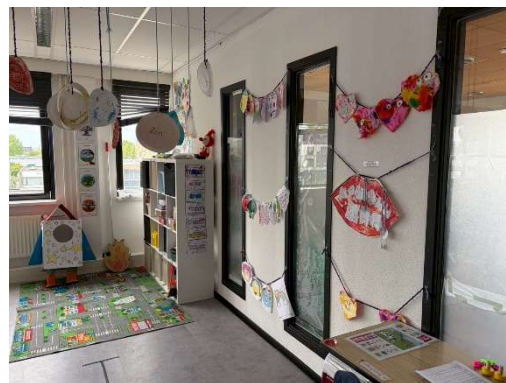


センターでは、社会性・学習・運動・自立性の4領域を軸に個別目標が設定されていた。特に印象的だったのは、「座って活動を楽しむ」「人と一緒に過ごす」といった基礎的な経験が、学習以前の大切な土台として丁寧に扱われていたことである。



また、「上着を着る」「待つ」「助けを求める」といった日常生活に直結する力が非常に重視されていた。学力だけではなく、「生活の中で安心して参加できる力」を育てる視点が徹底されていた。

教室にはピクトグラムや視覚スケジュールなどの視覚支援が豊富に用いられており、非言語の子どもでも意思表示しやすい工夫がされていた。感覚特性への理解も深く、音・光・触覚などへの配慮や、感覚遊びを通じた支援が自然に行われていた。



さらに、学校との連携の仕方も非常に印象的であった。学校の教師や校長が実際に Sama を訪問し、子どもの様子を観察しながら、「学校生活に必要な力は何か」を具体的に共有していた。その内容は療育目標にも反映されており、療育と学校教育が分断されることなく、移行に向けて共同で支援計画を作っている姿があった。



また、以前は Sama と学校を長期間並行利用する形を取っていたが、現在は短期間のサポート後に新しい環境へ移行する方法へ変化していた。安心できる場所に留まり続けることで、新しい環

境への適応が難しくなるという経験から、「移行する力」そのものを育てようとしていることが印象的だった。

保護者との関係性にも、家族中心支援の考え方が強く表れていた。毎日の記録や半年ごとの詳細レポートは作成されるが、外部共有には必ず保護者の同意が必要であり、「最終的な決定権は保護者にある」という姿勢が徹底されていた。

研修を通して感じたこと

今回の研修を通して、インクルーシブ教育とは、単に同じ場所で一緒に過ごすことだけを指すのではなく、子ども一人ひとりが安心してその場に参加し、学び続けられるように、環境や支援を調整していくことであると感じた。

また、支援とは子どもだけに向けられるものではなく、保護者や家庭、地域とのつながりを含めて支えていくことが重要であることも学んだ。特に、多文化社会の中では、「理解しようとする姿勢」や、「安心してつながれる居場所」の存在が、人々の生活を支える大きな力になることを実感した。

今後、日本でも多文化・多言語環境の中で生活する家庭が増えていく中で、言語や文化の違いによる不安を軽減し、誰もが安心して子育てや生活ができる地域づくりが求められる。そのためには、教育・福祉・地域が連携しながら、チームワークで支援できる体制を構築することが重要になると感じた。

～オランダ豆知識～

オランダは西ヨーロッパに位置する国で、国土面積は約4.2万km²と、九州よりやや大きい程度である。一方で人口は約1800万人、人口密度の高い国である。今回、ユトレヒトにあるミッフィー美術館を訪れた。ミッフィーは

オランダでは、日本でいうアンパンマンのような存在であり、子どもたちにとって非常に身近で親しまれている。館内は体験型のミュージアムとなっており、子どもたちが実際に遊びながら学べる工夫が数多く見られた。匂いを嗅いで

楽しむ展示や、さまざまな素材に触れて感触を確かめるコーナーなど、五感を使って体験できる展示が印象的であった。また、展示全体が子どもの目線に合わせた高さで作られており、小さな子どもでも安心して主体的に楽しめる空間づくりがなされていた。遊びを通して感覚や想像力を育む環境づくりに、オランダらしい子ども中心の考え方を感じた。

